

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04188

研究課題名(和文) 障害学生への合理的な配慮の提供におけるソーシャルワーク実践モデルの開発研究

研究課題名(英文) Research on the development of a practical social work model of reasonable accommodation for students with disabilities

研究代表者

長沼 洋一 (Yoichi, Naganuma)

東海大学・健康学部・講師

研究者番号：60558881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「障害学生修学支援ソーシャルワーク」に関するガイドブックを作成することを目的とした。まず、学生のディスアビリティを把握するのに役立つ簡便なツールがなかったことから、既存のWHODAS、SP感覚プロファイル、Vineland-II適応行動尺度を参考に、「学生生活にまつわる困難を把握するためのチェックシート」を開発し、健常学生と比べて困難の程度を視覚化しやすいプロフィール表も作成した。また障害学生修学支援を担当しているソーシャルワーカーからの情報収集に基づき、複数の事例を統合して架空事例を提示した「障害学生修学支援ソーシャルワークガイドブック」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの大学では合理的な配慮を提供する際には本人の訴えと診断書により検討を行っているが、発達障害に伴う感覚特性に難しさを伴う場合などでは診断とディスアビリティ、社会参加の障壁との関連が分かりづらく、適切な合理的な配慮の提供につながらないことがある。本研究により作成されたチェックシートは、学生が自覚的に相談できる困りごと以外にも視野を広げて幅広く情報収集を行う上で有用である。またガイドブックは、単に学生の訴えに合わせて文書を作るだけではない、ソーシャルワーカーの見えづらいつきについて事例を通じて可視化しており、関係者との連携を促進するうえでも有用である。

研究成果の概要(英文)：In this study, we aimed to make useful toolkits of social work practice for students with special needs. First, because there were no simple tools available to figure out not impairment but disability of students, we developed a Checklist to Identify Difficulties in Student Life(CIDSL) with reference to the WHODAS, the SP Sensory Profile, and the Vineland-II Adaptive Behavior Scale. CIDSL has 4 sub scales, so social workers can even find the difficulties that students with special needs are not complain about. Second, we made a Social Work Practice Guidebook of Academic Support for Students with Disabilities. This guidebook is based some interview for campus social workers who supports students with special needs. It provide case vignette and show how the social workers to support the students and to take a action to the college community.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：学生支援 障害学生 修学支援 合理的な配慮 ツール開発

1. 研究開始当初の背景

「障害者差別解消法」が平成 28 年に施行されて以降、障害のある学生に対する差別的取り扱いの禁止が全高等教育機関に義務付けられたほか、合理的な配慮の提供も国公立大学では義務、私立大学等では努力義務とされた。東京都のように条例で私立大学であっても義務とする地域も出てきた。そのような背景の中で高等教育機関に進学する障害学生は増加しており、日本学生支援機構も修学支援に関する事例を収集し、支援ガイドブックを作成している。しかし、その中では障害種別ごとに事例が分類されており、障害をインペアメントとして捉えていることが示唆される。障害者差別解消法は、障害の社会モデルを踏まえたものであるため、ディスアビリティの視点から支援を構築する必要があるが、障害学生の修学にあたってどのような活動しづらさ・参加の障害があるかに立脚した支援方法の検討はほとんどされていない。また、大学在学中は学年進行に合わせて大学への適応や学業の遂行、就職活動などと直面する課題が変化するが、こうした学年進行を踏まえた障害学生への継続的な支援体制構築に関する研究はほとんどない。

筆者らは、大学における学生支援業務におけるソーシャルワーカーの活用に関する調査に取り組んできた。その一環として、障害学生修学支援コーディネーターの実態に関する調査を行った。そこでは配置の有無、配置されている場合の業務内容と所持資格、配置していない場合の理由を明らかにすることを目的とした。全国の大学を対象とした質問紙調査を平成 26 年 10 月～12 月にかけて郵送法で実施し、436 校から回答を得た(回収率 58.0%)。障害学生修学支援コーディネーターを配置している大学は専任 37 校・兼任 70 校、計 107 校(24.5%)であった。コーディネーターの所持資格・経験では「臨床心理士」27 校、「社会福祉士または精神保健福祉士」18 校、「特別支援教育の実務経験」15 校、「保健師または看護師」が 12 校と続いており、その業務内容は多岐に渡った。コーディネーターを配置している大学では支援体制の充実が実感されていたが、未配置の大学では障害学生が少ないことや予算の課題が挙げられた。配置数は少ないものの、「社会福祉士または精神保健福祉士」を配置している大学では、そうでない大学と比べて「アセスメント」に力を入れていることが多く、ソーシャルワークの視点を生かした支援の特徴としてはまずは状況のアセスメントを丁寧に行ってから修学支援を構築していると考えられた。

また、キャンパスソーシャルワーカーを対象とした研究からは、キャンパスソーシャルワーカーが個別支援、アセスメント、モニタリングといったケースマネジメントプロセスに一定の時間を割いているほど、管理者から見たキャンパスソーシャルワーカーの活動の評価が高いことを示唆した(長沼ら 2015)。同様に、学生支援コーディネーターが適切に機能するためには、大学風土の実情に即したケースマネジメントプロセスが不可欠であると考えられる。学年進行に合わせたケースマネジメントが図示されても詳しい説明はなく(日本学生支援機構 2015c)、ソーシャルワークの観点からの研究は管見の限りではほとんど実施されていなかった。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究は当初は以下の目的を設定した。

- ・専任の障害学生修学支援コーディネーターを配置している大学に対して、ソーシャルワーク的な支援の実態調査を行う。
 - ・複数の事例を組み合わせ、支援モデルを提示しガイドブック案を作成する。
 - ・障害学生修学支援コーディネーター従事者を対象にガイドブック案に基づく研修を実施する。
- 研修参加者から得た意見に基づきガイドブックを改訂し、実践上使いやすいものとする。

まず、障害学生修学支援コーディネーターに対する予備調査等を行ったところ、障害学生の修学支援の現場では、ソーシャルワークの観点からみたアセスメントツールが不足しているという意見が複数挙がった。先述した通り、障害学生修学支援において社会福祉専門職を配置している場合に最も力を入れており、他職種との違いが表れたのもアセスメントに関する部分であった。そこで研究の目的を少し変更し、以下の通りとした。

- 1) 障害学生修学支援ソーシャルワークに役立つアセスメントツールを開発する
- 2) 障害学生修学支援ソーシャルワークの実際について質的調査を行い、支援モデルを提示するガイドブックを作成する。

3. 研究の方法

研究1 アセスメントに役立つツールの開発

1) アイテムプールの作成

障害学生修学支援に携わっているソーシャルワーカーに対する予備的調査で挙げられたのは、診断を把握するツールではなく、生活上の困難であるディスアビリティを把握するようなツールの必要性であった。特に発達障害やそれに伴う感覚特性の難しさなど、外からは見えづらい困難について定量的に把握できるツールの必要性が挙げられた。

学生のディスアビリティを把握するのに役立つ簡便なツールを検討するため、まず発達障害のアセスメントツールを検討したところ、多くは診断の補助ツールであったが、社会適応状態を測定する尺度がディスアビリティの把握につながるのではないかと考えられた。社会適応を測定する尺度には、Vineland-II 適応行動尺度や S-M 社会生活能力検査や ASA 旭出式社会適応スキル検査があったが、後 2 者はいずれも対象年齢が幼く、大学生には役立たないと思われる項目も

多かったことから、Vineland-II 適応行動尺度を参考に用いることとした。また学生の感覚特性の難しさについて把握するものとして SP 感覚プロフィール、そのほか全体的な障害の程度を把握するものとして WHO が作成した WHODAS を参考に用いることとした。それぞれの尺度項目を組み合わせてアイテムプールを作成し、内容が類似している項目を削除したほか、大学生生活にそぐわないと考えられる内容について複数の研究者で協議し、項目内容を修正した。さらに、大学生を対象に予備調査を行い、表現のわかりやすさを整えた。

2) 調査手続き

無記名式自己記入式質問紙を作成し、一般の大学生と障害のある大学生を対象に調査を行った。対象者の選定に際しては、キャンパスソーシャルワーカーネットワークに協力を依頼し、障害のある学生及び一般の学生の協力を依頼した。文書により調査の趣旨を説明し、同意が得られた場合にのみ調査への協力を求めた。配布・回収は郵送法にて行った。

また一般の大学生に関しては、研究代表者・分担者の勤務先大学でも協力を依頼した。文書及び口頭で調査の趣旨を説明し、同意が得られた場合にのみ調査への協力を求めた。対面にて配布し、回収に際しては封筒に入れてその場で回収した。調査の手続きに際してはそれぞれの所属機関の研究安全倫理審査委員会の承認を経て行った。

北海道から沖縄まで計 12 の大学から、323 票を回収した。うち回答の不備がみられた 13 票を分析から除外し、計 310 票を分析対象とした。うち障害ありの回答が 50 票、障害なしが 260 票であった。

3) 調査項目

調査項目は、基本属性、障害の有無、修学支援の有無に加えて、「学生生活の困難を把握するためのチェックツール案」と WHODAS 自己記入式版とした。

「学生生活の困難を把握するためのチェックツール(案)」はスキルを尋ねる項目と困難を尋ねる項目の計 61 項目から成り、「全く当てはまらない(1点)」から「いつも当てはまる(5点)」までの 5 件法で評価することとした。

4) 分析方法

学生生活の困難を把握するためのチェックツール(案)の各項目に関して、障害のある学生の困難を反映している項目を同定するため、障害学生群と健常学生群とに対象者を分け、各項目の回答分布を確認し、分布の差が大きい 40 項目を採用することとした。採用項目について、スキルを尋ねる項目の得点を逆転したうえで、全体で因子分析を行い、下位尺度を探索した。下位尺度と総得点のそれぞれに関して、Cronbach の係数を求め、内的一貫性を検証した。また T 得点を算出し、プロフィール表を作成した。プロフィール表の作成に当たっては、Achenbach らの開発した ASEBA システムの手法を参考にした。

研究 2 障害学生修学支援ソーシャルワークに関するガイドブックの作成

1) 架空事例の創作

障害学生修学支援コーディネーターに関する全国調査の自由記述、キャンパスソーシャルワーカーネットワーク全国研修会での報告内容に基づき、障害学生修学支援ソーシャルワークの実践例に関する架空事例を創作した。

2) ガイドブックの構成

研究者らで、ガイドブックの構成を 2 案作成した。第 1 案はソーシャルワーカーのアセスメントの視点や介入方法など、ソーシャルワーク業務を中心に据えたもので、それに挿話的に事例を提示するものである。第 2 案は架空事例を前面に押し出して支援の流れを提示しながらソーシャルワーカーの役割を伝える部分から開始し、アセスメントや介入方法などを別途盛り込むものである。

3) 障害学生修学支援に携わるソーシャルワーカーへのヒアリング調査

ガイドブックの草案を提示した上で、障害学生修学支援に携わっているソーシャルワーカー 2 名に対し原稿及び構成について意見を伺った。加えて修学支援ソーシャルワークにおけるディスアビリティの把握や基本的な介入の流れ、学年進行に伴う課題の変遷に合わせた対応のコツについて、より詳細な調査を行った。調査の実施に際しては、事前にメールにて趣旨を説明し、協力者の所属機関や利用学生の個人に関する情報を収集しないことを伝え、文書による同意を得て行った。研究の手続きに際しては研究分担者の所属機関の研究安全倫理審査委員会による承認を得て行った。

4) ガイドブックの完成

ヒアリング調査結果を踏まえて、さらに実践的な形となるように草稿を大幅に修正した。さらに障害学生修学支援担当としての勤務経験のあるソーシャルワーカーに内容の確認を求め、最終的にガイドブック原稿をまとめた。

4. 研究成果

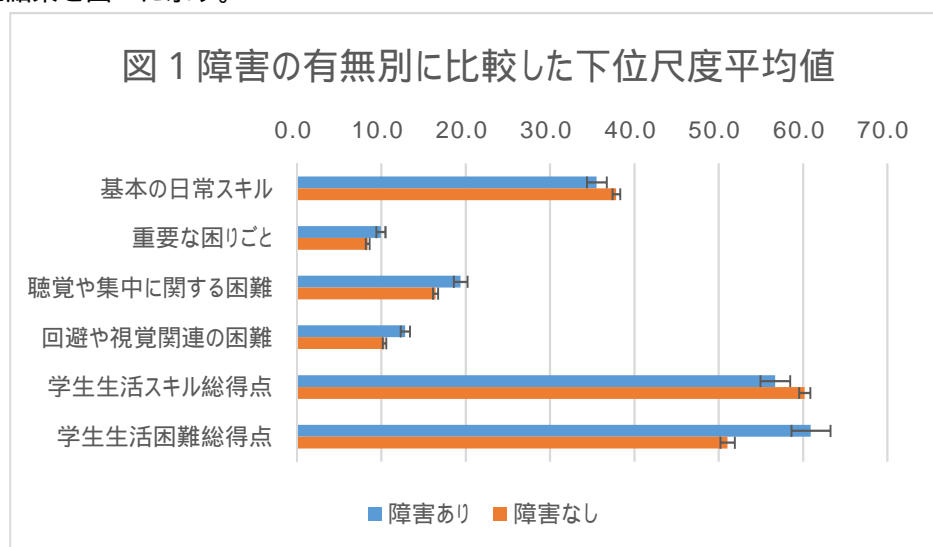
研究1 アセスメントに役立つツールの開発

1) チェックツールの開発

障害学生と健常学生との回答分布に差がみられた40項目に関して、因子分析(バリマックス回転)を行った。スクリープロットを確認し、因子数を4~9の間で変えながら探索的に検討を重ね、最終的に5因子での分析結果を採用することとした。因子分析の結果、複数の因子に0.3以上の因子負荷量が認められる項目は、尺度項目から除外することとした。また第1因子については独立した下位尺度とはしなかった。最終的に、第1因子の11項目からなる「基本の日常生活スキル」尺度、第2因子の5項目から成る「重要な困りごと」尺度、第3因子の6項目から成る「聴覚や集中に関する困難」尺度、第4因子の4項目から成る「回避や視覚に関連する困難」尺度に分けることとした。Cronbach's 係数は第1因子0.833、第2因子0.758、第3因子0.774、第4因子.731であった。さらに、尺度から除外した項目も含めて、第1因子を含む生活スキルに関する項目を合計した総得点と、第2、第3、第4因子を含む生活困難に関する項目を合計した総得点をそれぞれ算出した。15項目からなる「学生生活スキル総得点」の係数0.880、21項目からなる「学生生活困難総得点」の係数0.861であった。いずれもCronbach 係数は高く、それぞれ内の一貫性のある尺度となった。

妥当性の検証のために、他の尺度との関連を検討した。まず、障害の有無でそれぞれの下位尺度得点を比較した結果を図1に示す。

「重要な困りごと」「聴覚や集中に関する困難」「回避や視覚に関連する困難」及び「学生生活困難総得点」では障害の有無で有意差がみられた($p < 0.05$)。「基本の日常生活スキル」と「学生生活スキル総得点」では差がある傾向がみられた($p < 0.10$)。



障害のある学生で困難に関する下位尺度はいずれも得点が高くより困難感が高く、スキルに関する尺度ではより得点が低い傾向がありスキルに乏しい傾向が示唆され、一定の構成概念妥当性を確認できた。

また、WHOが開発したディスアビリティを測定するための尺度であるWHODASと下位尺度との相関を検討したところ、全ての下位尺度で0.4~0.6の中程度の相関がみられた。以上のことから、一定の併存妥当性が確認されたといえる。

表1 WHODAS 合計得点と下位尺度間の Pearson 相関係数

	WHODAS2.0		基本の日常生活スキル		重要な困りごと		聴覚や集中に関する困難		回避や視覚に関する困難		学生生活スキル総得点	
	N	r	N	r	N	R	N	r	N	r	N	r
基本の日常生活スキル	249	-.451										
重要な困りごと	250	.489	288	-.380								
集中力や聴覚関連	244	.425	284	-.417	288	.441						
回避や視覚関連	250	.408	293	-.305	291	.435	289	.500				
学生生活スキル項目総得点	246	-.426	292	.954	285	-.360	282	-.391	290	-.243		
学生生活困難項目総得点	239	.583	278	-.494	283	.771	283	.821	283	.745	276	-.459

注 すべての組み合わせにおいて $p < 0.001$

以上のことから、最終的に開発した「学生生活の困難を把握するためのチェックツール」は、障害学生の修学上のディスアビリティを把握するうえで一定の信頼性、妥当性を持ったツールであると考えられた。

次いで本研究の健常学生サンプルに基づいて、T得点の算出を試みた。ただし、全て健常学生とすると問題のないように分布が偏りすぎる恐れがあるため、障害のある学生サンプルからもそれぞれの下位尺度で特に困難度の高い上位5名までを標準化サンプルに追加することとし、結果として8名を追加した。なお健常学生サンプルのうち、チェックツールの回答に欠損が多い

ものは標準化得点の算出の対象外としたため、分析対象としたのは 253 名となった。それぞれの尺度得点に基づいて T 得点を算出し、プロフィール表を作成した。なお標準値サンプルと比較してプロフィールを求めることができるが、診断などが付くものではなく、特定の領域の困難度が把握しやすくなるだけであることについても欄外に注記した。

最後に、それぞれの尺度の特性を検討するため、健常学生を対象に性別の比較を行った。その結果、「基本の日常スキル」、「重要な困りごと」、「回避や視覚に関する困難」、「学生生活困難総得点」で有意な性差がみられ、男性のほうが女性より困難度が高かった。

表2 性別にみた尺度得点(t検定)

	男性			女性			t	p
	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.		
基本の日常スキル	100	36.6	6.8	138	38.7	7.2	-2.243	.026
重要な困りごと	99	9.4	3.5	139	7.5	3.2	4.300	.000
集中力や聴覚に関する困難	98	17.0	4.2	135	16.1	4.8	1.398	.163
回避や視覚に関する困難	100	11.0	3.3	139	10.0	3.2	2.230	.027
学生生活スキル総得点	100	58.9	9.9	135	60.9	10.6	-1.495	.136
学生生活困難総得点	94	54.0	12.1	133	49.0	13.1	2.967	.003

同様に学年別で平均値の比較を行った。「基本の日常スキル」「集中力や聴覚に関する困難」、「学生生活スキル総得点」「学生生活困難総得点」で学年による差がみられ、Bonferroni の補正によるその後の検定を行ったところ、大学3年生が1年生より困難感が低かった。大学生活になじんだ3年生であれば、困難感が他の学年より改善されていると考えられる。4年時にはまた困難感が高まるのは、卒業後の進路を見据えた変化の影響もあるだろう。

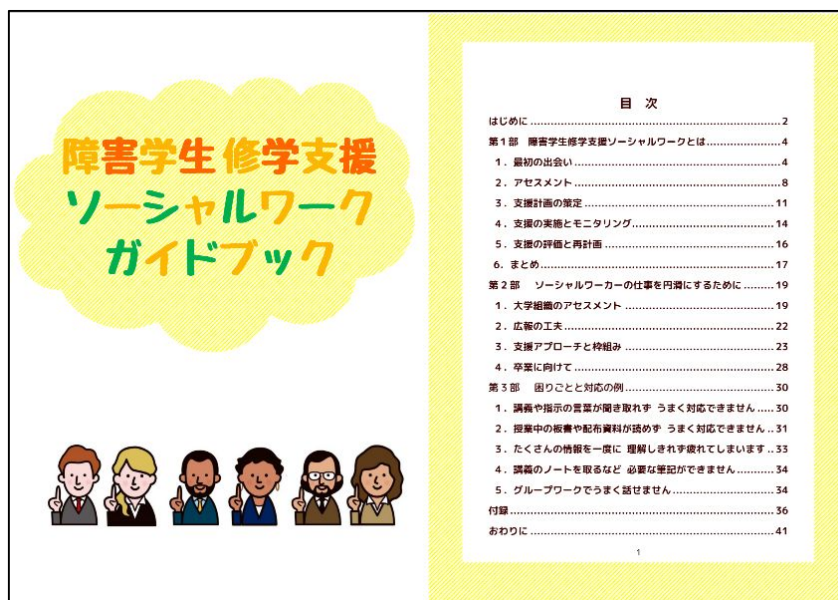
本研究では、性や学年によりわずかながら得点の差がみられるため、今後はさらにサンプルサイズを増やして尺度特性に関する検討をさらに重ねる必要がある。標準化サンプルが増えることで、男女別にプロフィール表を作り直すことができるだろう。またより現実に対応したツールの開発につながるだろう。

研究2 障害学生修学支援ソーシャルワークに関するガイドブックの作成

ガイドブックに掲載する架空事例は、入学前から卒業後まで障害学生として修学支援を活用する事例場合を想定して作成した。関係者・機関にはどのような人がいるのかを分かりやすく示すとともに、ソーシャルワーカーがどのような役割を果たすべきかも明示できる事例とした。

ガイドブックの構成では、第2案の、第1部で事例を通じて流れを示したのち、第2部ソーシャルワーカーが取り組む課題や検討すべき点を挙げる形とした。さらに第3部で、ヒアリング調査などからまとめた「ディスアビリティから考える支援の例」を具体的に挙げた。修学支援コーディネーターとしてソーシャルワーカーが力点を置いていることがアセスメントであったことから、アセスメントについては解説を多くし、特にディスアビリティを把握するうえで有用であると考えられた ICF モデルについては紙幅を割いて説明することとした。また研究1で開発したツールについても紹介した。最終的に43ページからなるガイドブックを作成した。

障害学生修学支援にあたっている現任者に対して PDF ファイルで送付したところ、「現場で使いやすい」「ソーシャルワーカーの見えづらい職務について教職員の理解を得やすい」「具体的な支援の方法例が示されているので、教職員への説明に使いやすい」といった肯定的な評価を得られた。またチェックツールについても「学生との話し合いに使えるようである」「最初にスキルから始まる表現になっているのが良い」などと肯定的な評価を得られた。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長沼洋一、長沼葉月	4. 巻 23
2. 論文標題 障害学生就学支援コーディネーターの活用状況	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東海大学健康科学部紀要	6. 最初と最後の頁 113-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長沼洋一、長沼葉月	4. 巻 15
2. 論文標題 四年制大学におけるキャンパスソーシャルワーカーの評価に関する探索的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

修学支援のための ソーシャルワーク https://sites.google.com/view/gakuseisien/ 「障害学生修学支援ソーシャルワークガイドブック」 https://drive.google.com/file/d/1p90uhLHDAvkSRn361Dp9vZHwwQAgx6_0/view キャンパスソーシャルワークネットワーク https://sites.google.com/site/campussw/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長沼 葉月 (NAGANUMA HAZUKI) (90423821)	首都大学東京・人文科学研究科・准教授 (22604)	